

I. (1) 第7学年における研究主題に基づく実践

人とのコミュニケーションの始まりである自己紹介を英語で行う

－ Becoming A Master of Self-Introduction －



後期課程に入って約3ヶ月、子供たちは、自分にまつわるさまざまなことについて英語で語る活動を行なってきた。小学校ですでに話したり聞いたりすることに慣れ親しんでいる子供たちが、読み・書きのスキルを獲得しながら、自己紹介活動を行なっていく。

子供たちが、新しいクラスメイトとの自己紹介から、多様な背景をもつ外国人とのやりとりに挑戦しながら、自己紹介に必要なスキルを探究していく実践である。

1 学びの構想

小学校における英語学習が教科化されて2年が経ち、中学校入学時には、日常的な英語を聞いたり話したりすることに慣れ親しんでいる生徒が多い。一方で、英文を読んで理解したり、書いて表現したりする活動は中学校から本格的に導入され、このギャップに苦しむ生徒も一定数いることが予想される。そのため、小学校で学んだ表現を振り返りながら、読み書きへとスムーズにつなげていく配慮が必要であろう。小中の接続を意識しつつも、英語をなぜ学び、英語の授業においてどのようなスキルや見方・考え方を身につけていきたいのかを常に意識をさせながら授業を展開していきたい。本単元は、4月から7月にかけて、「自己紹介」というコミュニケーションの始まりの場面において、相手を意識しながら、より良いコミュニケーションのあり方を探究していく。

クラスメイトとの自己紹介活動を通して学ぶコミュニケーションの意義

4月。JTEやALTが示すモデルを模倣しながら、生徒はクラスメイトと英語での自己紹介活動を行う。新しいクラスで、お互いにまだ緊張感のある中で、英語でのコミュニケーションを通して話す契機になり、お互いのことを知ることできる。また、すでにお互いのことを知っている生徒たち

にとっても、英語でのコミュニケーションで新たな発見があることに気づかせたい。

英語を表現するための文構造の理解

生徒たちは、口頭でのやりとりや書く活動、あるいは読みの活動の中で、日本語との文構造の違いに気づき始めるであろう。同時に、その違いに戸惑い、混乱する生徒もいることが予想される。主語や動詞の役割、be動詞と一般動詞という馴染みのない用語、語順のルールなどを、英語学習の初学者として整理させておきたいところである。しかし、教師が一方向的に説明をしても、その場は理解するかもしれないが、のちに自分が使う場面において活用ができない恐れがある。よって、教科書の本文を活用し、多くの英文の中から、その法則性を自分たちで見つけ、整理させていきたい。そこで、精緻化された知識が、次に続く発展的な自己紹介活動への足場かけとなる。

相手によって表現すべき内容を取捨選択し、よりよい人間関係を構築するための聞き手としてのスキル

一通りの自己紹介表現を学んだ子供たちは、初めて出会う外国人との自己紹介活動に挑戦する。ネイティブとのやりとりは緊張感を帯び、さらに相手の背景となる情報が全くない状態でのコミ

コミュニケーションとなる。ここで必要になるのが、聞き手としてのスキルである。単純に相手の言っていることを理解することに始まり、相手がどのような話題で話しを展開しているのかを把握しながら、その会話を続け、相手の情報を引き出したり、あるいは自分のことを伝えたりするには、聞き手としての態度が重要になる。聞き手として十分に意識をしてコミュニケーションに臨むと、子供たちは相手との共通点を見つけたりして話題を膨らませたり、あるいは共通点を見出せずに戸惑うことが想定される。そこで、もう一度、自己紹介において自分が何を伝えられるのかを整理するために、マインドマップの手法を提示し、自分の情報をより広く、深く準備をする。

このような学びを展開することにより、子供たちが、これから3年間英語の授業で学んでいくための英語そのものへの理解、英語学習のあり方、聞き手としての態度の素地を培っていききたい。

2 学びのストーリー

(1) クラスメイトとの英語での自己紹介(第1～4時)

4月。中学生になってまだ緊張感の残る教室で、教師が1人の子供に声をかけ、インタラクションが始まる。

教師： Good morning.

S： Good morning.

教師： I'm Hajime Kawai. (手で相手の発言を促す)

S： I'm .

教師： I'm from Higashiago Shogakkou.

S： I'm from .

教師： Nice to meet you.

S： Nice to meet you, too. (握手)

このような会話が他2人の生徒と行われた後に、それらをモデルに、教室内でペアワークが始まる。小学校での英語学習も生きており、スムーズに活動に取り組んでいる。教師は、この内容での自己紹介をレベル1と設定し、子供たちに伝えた。そ

の後、自己紹介の内容に、教師が1項目ずつ付け加えていった。「I like sushi.」「I don't like natoo.」「I'm good at drawing.」「I can play the guitar.」「I come to school by car」「I want to join table tennis club.」などの情報を1つずつ増やししながら、子供たちは毎回ペアを変えながら会話をしていく。

このような活動を繰り返していった後、JTEとALTがある対話をやって見せた。

教師： I'm Hajime Kawai.

ALT： I'm Melody.

教師： I like takoyaki. Do you like takoyaki?

ALT： Yes, I do. But my favorite food is ...

教師： I see. Do you like music?

ALT： Yes. I often listen to music.

教師： What kind of music do you like?

ALT： ///

子供たちに何か気づいたことはあるか尋ねると、「発音いい」「速い」などのコメントなどを皮切りに、「” I see.”」って言っていた。」「質問をしていた。」という点が共有された。

教師にとっては、生徒たちが英語であいづちを打ったり、質問をしたりできるのかは掴めていなかったもので、力量の把握も兼ねて、教師のモデルを参考に一度やってみようという提案した。

すると、「I see.」「Really?」などのあいづちはちらほら聞こえてきたが、質問をしようとするところで会話が止まっているペアが多く見られた。

(2) コミュニケーションは正確さ?それとも流暢さ?(第5時)

前時の活動の中で、質問がうまくできなかった理由を尋ねると、「どう聞けばいいのかが分からない」という意見が多かった。教師にはここで1つの迷いが生じた。それは、明示的に質問の仕方を教えるか、あるいは質問が正しく作れなくてもコミュニケーションを継続できるような支援をするかである。ここでは、後者を選択した。それは、子どもたちの「どう聞けばいいのかわからない」「英文が作れない」という課題は、「正しく英

語を話さないとコミュニケーションが成立しない」と認識していると考えたからだ。そこで、教師は2つのモデルを示した。1つは、正確さに気をつけながら丁寧に間違えないように話しているモデル。もう一方は、文法的な側面で見れば無茶苦茶であるが、とにかく多くを伝えようとしているモデル。どちらも自己紹介というトピックで1分間の制限の中で行った。子どもたちにどちらの方が自己紹介の会話としてよかったか尋ねると、迷わず後者と答えた。理由としては、「たくさんのことが知れる」「英語を気にしているんじゃない、伝えたいということが伝わった」などが挙げられた。

その後、もう一度自己紹介活動に取り組んだが、子供たちは、声量が歴然と変わり、単語単位でもメッセージを伝えようとする姿が見られた。コミュニケーションの本質的な意義に気づくことができた。一方で、いずれはタイミングを見計らって、正確性を追求する場面も必要であるのは明らかであった。

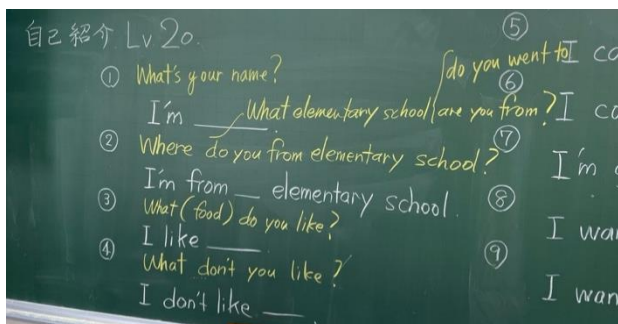


写真1 質問する表現を共有

(3) 自己紹介を文で書いてみる。(第6時)

ここまで、口頭での会話を継続してきたので、一度英文で書いてみようということになった。書くという活動になった途端、子供たちの間での技能の差が明らかになった。あやかはスラスラと10文程度の自己紹介文をあっという間に書けてしまった。一方で、海斗は名前と出身小学校、好きなものを書いた後は一向に筆が進まない。それまで言っていた、嫌いなものや得意なもの、入りたい部活動などの情報が書けない。早く終わった

颯太が海斗の作文を助けている。そこで、颯太が「まず、主語を書いて、その後 be 動詞を・・・」など、専門用語を使って解説をし始めていた。海斗は余計混乱している様子であった。

ここで英語の基本的な構造について整理する必要があった。

(4) 英語と日本語の違いへの気づき(第7～9時)

英語の文の成り立ちについて理解をするために、教師は、黒板に日本語で「私は河合創です。」「私はたこ焼が好きです。」「これは机です。」などを書いた。「この文を『違います』っていう文に変えるとどうなる？」と尋ねると、「私は河合創ではありません。」と答える。「じゃあ質問の形にできる？」と問うと、「あなたは河合創ですか?」「あなたはだれ?」と答えた。次に、同じ内容を英語で場所した。「I am Hajime Kawai.を違いますという文にすると?質問の形にすると?」と尋ねたら〇〇が「I'm not Hajime Kawai.」「Are you Hajime Kawai?」と答えた。どのように文を作ったのかを聞くと、「be動詞の後ろにnotをつけて…」

「主語の前に be 動詞をもっていって…」と一部の子供たちが口々に解説を始めた。塾に通っている子であろう。教師は、それらの発言を黒板にまとめながらも、そのやりとりについていっていない子供たちの不安な視線が気になった。このまま進めてはいけないと感じ、一旦流れを止めた。ここでも、教師の迷いが生じ、明示的に教えるか、子供たちの発言を整理しながらまとめていくか悩んだ。どちらも良作ではないと思い、教科書とタブレットを使い、各自でまとめることにした。

子供たちは、1時間どっぴりと自分の時間を取り、1枚の紙に「be動詞とは何か」「主語の役割」「名詞とは」などを書き、まとめていく。静かに、しかし自分の疑問をもとに調べながら情報を整理していく姿が印象的だった。

後の省察で、〇〇は「自分で調べることで、最初は聞いていてもよく分からない主語とか動詞とかのことが理解できた。」と記している。

次の授業で、各自がまとめたことを黒板で共有した。



写真2 共有された文法知識

(5) 初めて出会う ALT との自己紹介にチャレンジ！(第10時)

これまで、基本的な自己紹介の表現やあいづち、そして質問の方法などを学んできており、英文の作り方の基礎も理解をしてきた。ここで、教師から新しい課題「Becoming A Master of Self-Introduction」が提示された。

まず、自己紹介の目的について確認する。「自分のことを伝えることと相手のことを知り、良い人間関係を築くスタートにする」ということが言語化され共有された。

次に、どのような自己紹介が良い自己紹介と言えるのかを考えていく。この時点では、「ボディランゲージを使う」「笑顔で」などの意見が出たが、それ以上はあまり上がらなかった。

教師が、「これまではクラスメイトと自己紹介をしてきたけれど、今日はいろんな外国人とやってみよう」と告げた。「メロディ先生とですか？」と〇〇が言う。「違いますよ。こちらの方々です。」

スクリーンに13名 ALT が映し出された。「河合先生の知り合いですか？」「かつこいい〜」など子供たちの胸が瞬時に踊っているのが分かる。「えっ、この人たちと中継でつながっているんですか？」と瑠奈が言う。「そうだと、いいんだけど、録画です。でも実際に自己紹介の場面を体験できますよ。」

ここで子供たちに示しているのは、県内の ALT に協力してもらい、自己紹介動画を撮影し、送ってもらったものを Power Point にまとめたものだ。

写真3の「Click」ボタンをタップすると、その ALT の動画にジャンプするようになっている。各 ALT の動画は、教師が事前加工しており、ひとまとまりの情報を言い終わると、一旦ストップするようになっている。そのストップしている間は、子供が反応・返答できる時間である。

例

Hello. I' m Hana. Nice to meet you. Stop

I' m from the Philippines. Stop

My birthday is September 15. Stop

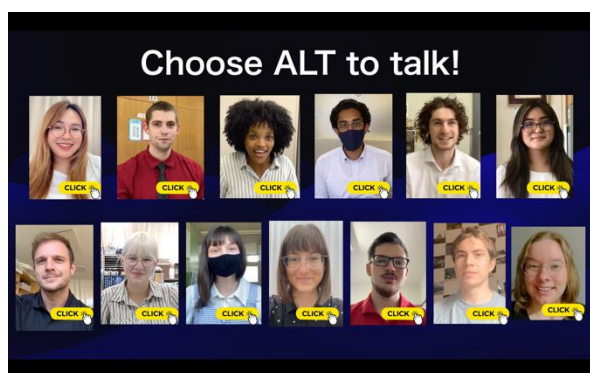


写真3 スクリーンに映し出された ALT

全体で、一度体験してみた。スクリーン上で ALT が話し出す。「Hi, I' m Hana …」とまだ名前を言い切っていない時点で、子供たちは口々に「Hello!」「Nice to meet you.」と反応し出す。「I' m from the Philippines.」に対して「I' m from Japan.」と答える子もいれば、「I' m from Fukui.」と言い直す子もいる。ALT の自己紹介が後半に差し掛かると、教室に響く声量が小さくなっていく。ALT が「I like to play games. So, I often play Pokemon on my switch after school. My favorite Pokemon character is Lizardon. Do you know him? How about you? Do you like to play games? What game do you play?」と述べる。続いて、好きな日本アニメのことや夏休みにしたいことを言って動画が終わった。子供たちがやりとりを振り返る。

「発音が良すぎて聞き取れない部分があった。」
「ゲームの話題が自分は興味なくて、答えられな

かった。」「どう話を続けければ良いのか分からなかった。」「共通点が見つからないと会話が続かない。」「単語が出てこない」などの課題が挙げられた。

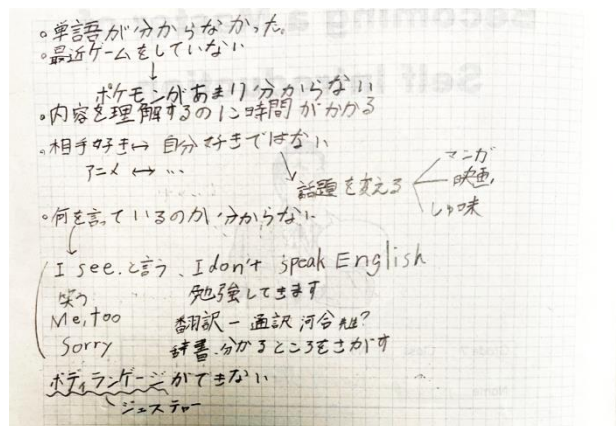


写真4 紗耶香の会話の振り返り

(6) 自己紹介に必要な準備とは？(第11～12時)

まずは、いろいろな話題について会話ができるようにするための準備をすることになる。ここで、教師から I-Map を作ろうと提案される。I-Map とは、いわゆるマインドマップで、その中心を「I」にしてアイデアを広げていく。

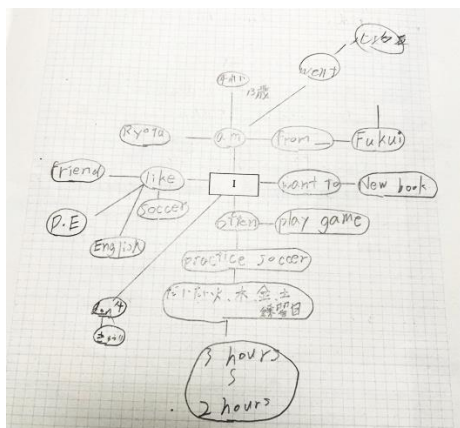


写真5 陸斗の I-Map

次に、ペアで会話の練習をする。ペアの片方が ALT 役を行い、会話をリードしていく。ペアを複数回変えながら、相手の発言内容によって、会話の展開が変わっていく。1回の会話ごとに、子供たちは振り返りを書いて行った。



写真6 ペアでの会話練習

華は、「だんだん慣れてきて、答えられるようになってきた」と回数を重ねることで流暢さが増したと実感していた。ゆかりは「マップに書いていなかったものが出てきたから、すぐに答えがだせなかった。」と振り返っており、自分のマップに情報を書き足していた。ほのかは「話題が合わない時はやっぱり難しい」と自分と異なる趣味や趣向をもつ相手との会話に課題を感じていた。

(8) 個人でチャレンジ！(第13時)

ペアでの練習を終え、いよいよ ALT との会話に挑戦することになる。まず、モデルとして、陸斗が代表でチャレンジすることになった。周りの生徒の要望もあって、男性の ALT との会話を選択した。



写真7 陸斗と ALT の会話

ALT : Hello, my name is Vince. I'm from Minnesota, USA.

陸斗 : I'm Ryota. I'm from Japan.

ALT : My birthday is May 23, and I'm 34 years old.

It's very nice to meet you.

陸斗： My birthday is June 24. And I'm thirteen years old.

ALT： I really really love sports. I love all sports. I like soccer, basketball, hockey, (中略), but my favorite sport is baseball.

陸斗： I like soccer.

ALT： My favorite team is New York Yankees. My favorite player is Aaron Judge. Do you know him? He is really cool.

陸斗： I see. (周りが「お～っ」と歓声)

ALT： I also love dogs. Dogs are my favorite animals. How about you? Do you like dogs? I like..., Me, too. (周りが「お～っ」と歓声)

陸斗： I love goldren retriever
I don't have dogs right now. I want one.

ALT： I see. I see.

陸斗： This summer vacation, I want to go to the

ALT： ocean. I want to swim in the sea.
I want to go to ... sea, too.

陸斗： OK. That's very nice to meet you. See you.

ALT： See you.

陸斗：

振り返りで、裕樹が「あそこで Me, too. とか I see. と言えるのはすごい」と尊敬の念を持っている一方で、陸斗本人としては、困ったら「I see.」って言うっておけば大丈夫という打算的な側面もあったようだ。

次に翔太が挑戦する。

ALT： Hello, my name is Tomara.

翔太： Hello. My name is Kanji Mitani. Nice to meet you.

ALT： I'm from South Africa.

翔太： I see.

ここで、大貴が「自分の出身地は言わなくていいの?」と口を挟むが、そのまま進んでいった。

ALT： I love movies. Especially I love horror movies.

Oh, you like horror movies. Maybe you like

翔太： Chucky.

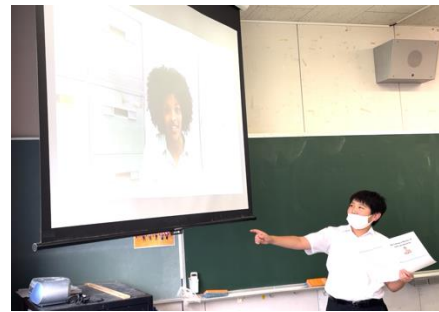


写真8 翔太とALTの会話

翔太は、相手の言ったことをオウム返ししつつ、相手が好きであると考えられるものを予想しコメントしている。聞き取るだけでも大変なやりとりにおいて、機転をきかせて対応している。

その後、PowerPoint のファイルが各子供たちのタブレットに配布され、個人で好きな相手を選んで会話を始めていく。スピーカーに耳を寄せながら、相手が言っていることを聞き取りながら、自分なりに答えていた。翔太は、先ほど全体場で話していた相手とは別のALTを選び、ジェスチャーを交えながら、やりとりを楽しんでいた。



写真9 翔太がタブレットで会話する様子

(7) 自己紹介文を書く 第2弾 (第14時)

最後に、改めて自己紹介文を書いた。教師としては、I-Map で整理し、拡充された情報を、クラスメイトとの活動やALT との会話の中で、繰り返し使ってきた表現を、最後に正確さを意識しながら書けるようにしてほしいという意図があった。

子供たちは黙々と取り組んでいる。そのような中で、翔太は、「Hello, I' m Kanji Mitani. Call me Mickey. Nice to meet you.」と喋りながら作文を書いている。まるで、タブレットでALTと会話していた様子を、頭の中でイメージしながら書いている様だった。彼の中では、自己紹介というコミュニケーションの場面において、対話の相手が常に存在し、その相手を意識しながらやりとりをするというイメージが持っているのだろう。作文の最後を締めくくるために、彼はタブレットで「聞いてくれてありがとう」を翻訳し、書き加えている。

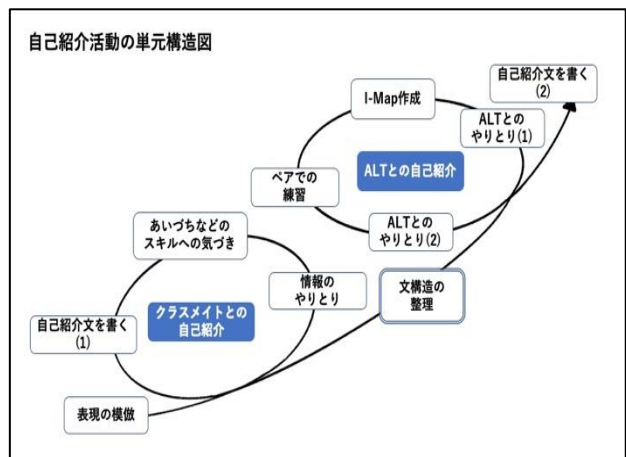
Hello, I' m Shota Taniguchi.
Call me Mickey. Nice to meet you.
I' m twelve years old. How old are you?
I like video games. I love Pokemon.
Do you like any video games?
I like many foods. For example, takoyaki, pizza and yakisoba. What food do you like?
I want to go to Hawaii because Hawaii' s nature and ocean are very beautiful and I can relax.
Thank you for listening to my self introduction. Have a nice day. See you.

一方で、教師が教室内を回りながら、書く支援をしている中で、真奈から「先生、これいつ発表するんですか?」と問われた。この言葉を聞いて、教師は自分こそがコミュニケーションとは何かを失念し、活動を指示していたことに気づき、愕然としてしまった。子供にとって書くという作業は、単に情報や思考、感情を言語化するためのだけでなく、コミュニケーションの1つの方法として、他者にメッセージを伝えるという機能をもっているということを理解していたのだ。教師にとっては、2回にわたって書いた自己紹介文の目的の欠如への気づきとなり、大反省をすることとなった。

3 省察

(1) 自己紹介活動を通しての学び

英語科では、英語を用いて「他」とつながり、世界観を広げることを本質的な学びとして位置付けている。そのような学びを目指す上で、本単元の自己紹介活動が子供たちにどのような価値があったのかを省察していく。



①「他」とのつながりのスタート

自己紹介活動は、初対面の相手と交わすコミュニケーションであり、「他」との関わりを深める営みの起点となる活動である。英語の学びとは、常に「他」との関わりの中に存在し、相手意識を持ち、良き聞き手となり話し手となることが重要になる。その意味で、対話の相手をイメージしつつ、喋りながら自己紹介文を書いていた翔太や、書いた作文の発信先を気にしていた真奈からも「他」を意識して学びを深めていることが伺える。一方で、陸斗のモデルに習い、困った時には「I see.」で回避するという手段を乱用している子もおり、「他」とのつながろうとすることあきらめてしまう様子も見られた。動画素材という一方的なもので、質問をしたり、聴き直しを求めることが物理的に不可能であったために生じた問題でもあろう。今後、リアルなコミュニケーションの場の中で、いかにやりとりの最中の課題を克服するかについても探究していく必要がある。

②活動の必然性

コミュニケーション活動において重要なのは、設定された場面状況が、自然でかつ、必然性のあ

る必要があるのは周知の事実である。それにも関わらず、本單元における「書く」活動にはその視点が抜け落ちていた。実際に話す活動をする前に書く活動があり、話す内容を整理する目的として設定されてもよかったのだろうが、文を書くとき即時的に英文を構成するスキルが身に付かず、また英文を読みながらのやりとりになることが危惧されたために、書く活動は途中では行わなかった。これは、私自身の授業構想における失敗だと言える。幸い、子供たちは、必然性がないから活動に向き合わないということはなく、丁寧に自分の情報を書き記していた。

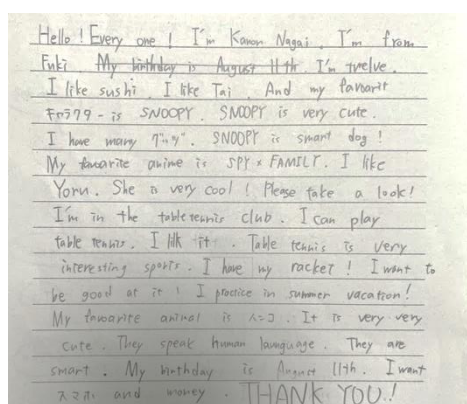


写真 あやかの自己紹介作文

教師には、子供たちの発言やその意図を汲み取りながら、共感したり、あるいは問いを投げかけたりしながら、自然で必然性があり、尚且つ意味のあるコミュニケーションが展開される授業を展開することが求められる。このことを改めて、考えさせられた單元であった。

(2) 子どもと共に学びの価値を繰り上げる

英語科における学びの価値の繰り上がりとは、「コミュニケーションの質を上げること」と捉えている。質には、内容的な視点と言語的な視点の

2つの視点がある。

今回の自己紹介で言うならば、内容的な視点とは、自分の何を伝え、相手の発言に合わせてどう答えるか、ということになる。子供たちは、自分の情報を伝える表現方法を獲得しながらも、相手が提供する話題や質問に対峙する際に、課題を抱えていた。そこで、マインドマップを拡張させながら、自分が話せる話題の幅を広げたり、「I see.」と述べ、話題を転換させたりと、より良いコミュニケーションの方法を模索して行った。

言語的な側面については、小学校での学びもあり、自己紹介で使われる表現を聞いたり話したりすることはスムーズにできるが、読んだり、書いたりというところでは個人差がある。このギャップを埋めていくには、インプットとアウトプットの往還が必要になるだろう。十分に聞いたり、話したりした内容を、読み、書く。書いたものを互いに読んだり、それについて話し合う。言語的な質の向上は、このコミュニケーションにおける4つの技能の統合的なつながりの中で、教師の即時的で的確な見取りとコーディネートによって徐々に培われるものになるだろう。そのやりとりの中では、同時に内容面での繰り上がりも期待される。そのような学びが生まれる授業をデザインするのが教師の役割であろうと改めて感じるところである。

(執筆者 河合 創)